

と記すほど白居易に心酔していた。

また、白居易は、仏道を学びながらも、なお詩作に魅いられた己れを「唯だ詩魔有りて降すこと未だ得ず」と詠じた。保胤も、最後まで捨て切れなかった作文への思いを「菩提の妨げ」と呼んだのである。^{注14}

ひるがえって、匡衡はどうであろうか。既に述べたとおり、匡衡は^{注15} 儒学を宗とする文章道を仏教と矛盾しないものとして受け止めている。

すなわち「冬日登天台即事」詩序に言う「宜しく詩を以て仏事を作すべし」作文がそのまま仏事になるという考えである。先の白居易の「蘇州南禅院《白氏文集記》」や同じく「香山寺白氏洛中集記」の

願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の過を以て、転じて将来世々の讚仏乗の因、転法輪の縁と為さん

が、匡衡の考えの裏付けとなっていると思われる。

しかしながら、同じく「詩文を以て讚仏、悟りの縁としたい」という内容の言葉でも、匡衡には白居易の言う「寓興方言」「縁情綺語」「放言綺語」等の、己れの中の詩魔に対する深い反省はない。匡衡にとつては、仏教は一般的な貴族の信仰を越えるものではなかった。彼はあくまでも、学問の家大江氏の棟梁として、稽古の力による出世栄達を期待する儒者文人なのであった。

注1 本朝文粹卷十三「為仁康上人修五時講願文」引用は新日本古典文学大系による

注2 群書類従本『江談抄』。訓みは『江談證注』川口久雄・奈良正一による。なお、この願文が仁康上人入唐の際のものというのは『江談抄』の誤りである。

注3 「中古歌仙三十六人伝」による。

注4 群書類従本『江吏部集』上 地部

注5 『公卿補任』による。

注6 この句を含む部分は現行の『芸文類聚』には載せられておらず、『文選』本文に見えるのみである。

注7 勸学会についてはその成立、沿革については桃裕行『上代学制の研究』第三章第四節「勸学会と清水寺長講会」に、またその会衆や性格については小原仁『文人貴族の系譜』第三「勸学会結衆の浄土信仰」に詳しい。

注8 注3に同じ。

注9 訓みは柿村重松『本朝文粹注釈』により、一部私に改めた。また、後の解釈も特に断らない限り、柿村氏の釈を参考にした。

注10 後藤昭雄『平安朝漢文学論考』「大江以言考」

注11 小原氏前掲書第四「慶滋保胤の思想と信仰 一、池亭記の意義」

注12 注9に同じ。

注13 注9に同じ。

注14 『白氏文集』1004 開吟

注15 『和漢朗詠集』にも採られた「香山寺白氏洛中集記」をもととする「狂言綺語」観については、三角洋一「いわゆる狂言綺語観について」『新古今集と漢文学』（和漢比較文学叢書第十三巻）が最近の論として詳しい。

（平成四年九月一六日受理）

感じていたと思われるのが、勸学会の発起人である慶滋保胤である。彼は、具平親王を中心とする文壇に属し、『本朝文粹』に二十二篇の作品を遺す文人であったが、五十代半ばの寛和（九八六）年出家し、寂心と名のつた。冒頭に挙げた『江談抄』の記事は、その後の正暦二年のことである。保胤は匡衡の願文を「菩提の妨げとなる」と言う。仏事の祈願を述べる願文でさえ、それに感動することは仏道修行に矛盾することとする態度は、まこと厳しいものと言わねばならない。保胤自身、出家後も願文等を作成することもあったが、そこには匡衡の「詩を以て仏事を作す」といった樂觀的な姿勢とは全く違うものがある。

嗟乎、花言綺語の遊、何か神道に益あらん

希有難解の法、其の仏身を期すべし

此の時に当たるや、一神に慶有らば衆生之を頼まん

功德無辺にして一切に普及せん。敬白

「賽管承相願文」

右は寛和二年、出家直後の作である。既に詩文の神となっており、詩会が行われるのが常であった天神廟への願文において、詩会を「花言綺語の遊であり神道の役には立たない」と言い切る。出家した保胤（寂心）と在俗の匡衡とでは作文に対する考え方も違うかもしれない。しかし保胤は、出家前から「詩を以て仏を讚ふ」ことに微かな違和感を持っていたのではないか。出家前の保胤の作に「暮春於六波羅蜜寺供花会聽講法華經 同賦一称南無仏」なる詩序がある。その末尾を挙げる。

中に白髪を垂らし朱衫を紆ふ者有り

身は暫く柱下に在りと雖も心は尚ほ山中に住むが如し
少壯の年、愁りに一事一物を詠じ、強ひて名聞を求めたり
衰暮の日、或は蕪詞狂句を記し、將に菩提を撰げんとす
今日推されて唱首と為るも、敢て再辭せず
聊か大綱を述べて後事に備へんと爾か云ふ

注13

朱衫を着て柱下にいるというのだから、保胤が未だ六位で少内記であった天元年間の作であろう。年老いた今、菩提を撰ずるための詩作を自ら「蕪詞狂句」と言う。確かに詩序の末尾は序者自らを卑下して見せるのが、ある種定形のようになっていたから、自作を「蕪詞狂句」と呼ぶことも考えられなくはない。だが、いくら謙退の辞とはいえ、仏を讚える詩文を表すには言い過ぎではなからうか。

これら「花言綺語」「蕪詞狂句」の語は、白居易の用語に拠る。

太原の白居易、字は楽天、文集七表合して六十七卷、凡そ三千四百八十七首有り。一略一然らば寓興の放言、縁情の綺語なる者も亦た往々之れ有り。楽天は仏弟子なり。一略一願はくは今生世俗の文字、放言綺語の因を以て、転じて将来世々の讚仏乘、転法輪の縁と為さん。（原漢文）

「蘇州南禪院白氏文集記」

保胤の語と全く一致するものではないが、言わんとしていることは同じである。保胤は有名な「池亭記」の中で

唐の白楽天を異代の師と為す、詩句に長ずるを以て仏法に帰すればなり

知るべし、今日綴属の文、定めて後日總別の記となるを。既にして岫幌静かに巻き、巖肩斜めに排ひらく。妄轡青霄の上に断ち、法輪丹地の中に転ず。ああ、釈尊入滅の後、鶴林の色長く空しく、慈氏出生の前、龍華の跡尚ほ隔れり。幸ひに吾師の教化を蒙る。豈に諸仏の護持に非ずや。以言久しく前路を嘆きて、未だ後塵に随はず。籍を函関の鳥に列ねて翅つばさを淮南の雲に慰むるを望むと雖も、名を鷹門の魚に編み暫く鱗を河上の雨に振はんと思ふ。結縁の事、必ず拔済を喜ぶと爾か云ふ。

一読して気付くのは、書き出しが匡衡の詩序と殆ど同じだということである。この表現が白居易の「草堂記」に拠っていて、天台山と直接関係しないことを考えれば、匡衡と以言の詩序の製作時期の前後関係が気になるところである。この以言の詩序の製作は、後藤昭雄氏の「大江以言考」によれば、天元五（九八二）年九月十三日であり、これは匡衡の詩序より十一年も早い。匡衡が以言の詩序の冒頭表現を模倣したことは十分考えられる。^{注10}

だが、詩序の内容そのものについては、以言と匡衡とは大きく異なる。以言の詩序や彼と勸学会の関わりについては、先述の後藤氏や小原氏が触れておられるので、今それらによって検討する。

小原氏は、以言が脱俗や遁世に強い関心を示していたとされる。詩序中でも前半部の、師貞公の人となり注11を説明するのに「忽ちに繁花の榮を辞し、空しく一実の理に帰す。——略——公の如き者は行藏の道其の時を得て、真俗の諦其の相を究めたり」つまり、「若いころから登用され世俗の榮華を得ていたにもかかわらず、それをさつと捨てて仏道の実理に帰依された。公は進退のときを心得ていて、真諦、俗諦両相の趣を究めておられる」と、俗を捨てて仏教に帰依した貞公を称賛する。なるほど、詩序の重要な機能として主人役の人物を誉めるとい

とがある。以言の場合は相手が僧侶であるから、その俗世を捨てた態度を称えるのは当然かもしれない。が、それにしても先に挙げた部分の略したところでは、殷の紂王を滅ぼした周を嫌って首陽山に身を隠した伯夷、叔斉や、五柳先生こと陶潜の隠遁を菩提の願、すなわち仏道の修行をしなかった点で劣っているとす。伯夷、叔斉も陶潜も中国における隠士として儒、老莊両方から評価されている古人である。それらよりも出家した貞公のほうが優れているという書きぶりから、以言が仏教を重んじていたことがわかる。

右に述べた部分は、貞公に対する挨拶の要素を含むが、詩序の末尾の部分は、以言自身の述懐を記す。「幸に吾が師の教化を蒙る」以下は、後藤氏の解釈に従えば「師のおしえを受けながらも、彼に随って結縁するには至らず、我が身を文章道の中に置いたからには登竜門を昇ること、対策及第こそ望みである。」ということになる。確かに以言も脱俗出家ではなく、立身出世の道を選んだ。しかし、先の匡衡が、「徒らに尼山の雪に老ゆ」と長年学問に励みながらそれが認められないつらさを訴えるように見えても、道長から仏を称える詩を作るように命じられ、「敢て死を辞せず、況や詩に於いてをや」（死さえも恐れないのだから、詩を作るなど恐れるに足らず）と「死詩」のごろ合わせをするほどはしゃいでいるのに比べれば、以言は仏教と儒教の二つが相反するものであることをずっと深刻に受け止めているように思われる。これは、当時の以言が、大江氏の傍系であるためか、未だ対策及第を果たせずに将来に不安を抱いている状況にも拠るのかもしれない。

四

さて、儒教を旨とする文章道と仏道との間にいつそう大きな乖離を

我等当初何処住 我等当初は何処にか住む
不蒙教化幾咨嗟 教化を蒙らずは幾くか咨嗟せん

暮春勸学会於親林寺聽講法華經同賦課惠日破諸暗各分一字

惠日効能出一乘 惠日の効能一乘より出づ

破来諸暗誓无弘 諸暗を破来りて誓无も弘し

先銷有漏光高映 先づ有漏を銷して光は高く映り

更斷無明影遠澄 更に無明を断ちて影は遠く澄みたり

鷄足如風排苦霧 鷄足風の如くして苦霧を排け

鷲頭非水解疑氷 鷲頭に非ざれど疑氷を解く

今春合掌初聞偈 今春合掌し初めて偈を聞く

除却塵勞不愛憎 塵勞を除却せられて愛憎せず

どちらの詩も大通知勝如来や惠日（仏智）を称え、その教化功德によつて煩惱の闇から抜け彼岸に至ることの喜びを述べる。だがそれだけであつて、無明の世である俗世に生きる苦しみや、そこを厭い捨てようという意志は読み取れない。僅かに「探得大通知勝如来」詩の尾聯に、仏の教化なくしては悲嘆に沈むばかりで行き処もない衆生を詠じてはいる。しかしそれも如来の力で彼岸に登ることができる安心の下でのことである。「惠日破諸暗」詩でも、尾聯に「今春初めて仏に礼拝し偈を聞けば、俗事の煩わしさも取り除かれて心は平安である」と述べるが、これにしてもあくまでも在俗のままのことである。

もちろん、勸学会は『扶桑略記』のいうごとく、「聞法歡喜讚の心に由る」ものであるから、自己の苦しみを訴えるよりも、仏法を喜び称える気持ちのほうが強いということなのかもしれない。が、やはり樂觀的なものに過ぎるようにも思われる。

なお、「惠日破諸暗」詩の「苦霧を排く」「疑氷を解く」の表現は

いずれも深い迷いが晴れることを意味し、先の「冬日登天台即事」の「霧を開く」「疑氷を叩く」と類似のものである。あるいは、勸学会で得た知識や作文の経験が、その後の匡衡の仏教詩や願文の作成に寄与するところ大であつたのではないか。

三

ここまで大江匡衡の漢詩文についてのみ考察してきた。だが、匡衡の作を考えるうえで見落とすことのできない人物がいる。それは匡衡と同じ大江氏の、ただし傍系に属する大江以言である。彼は匡衡よりも三歳年少で卒年も匡衡より二年早いだけであるから、殆ど同じ時を生きたといえる。その以言に「七言。晩秋於天台山圓明房前閑談」なる詩序がある。全文を訓み下して挙げる。

天台山は天下の山に甲れり。其中の奥区は則ち是れ吾師貞公の洞房なり。公本天枝を分ち、早く地芥を拾ふ。兩翼任重し。自ら搏扶を家門の風に期す。一角才高し。功名を登庸の日に立てんとす。爰に去にし天元五年、孟夏六日。忽ちに繁花の榮を辞し、空しく一実の理に帰す。昔孤竹二子の周を去りし、春の蕨煙老い、五柳先生の晋を遁れし、秋菊の霜寒し。彼皆偏へに高尚の志を養ひて、未だ菩提の願を行せず。公の如き者は行蔵の道其の時を得て、真俗の諦其の相を究めたり。凡そ蕨の高致の誠、視聽の志より出たる者か。時に重陽過ぎて四日、孤月昇りて三更。美州源太守、其の連枝の美を思ひ、此の絶嶺の趣を尋ぬ。漸く塵中の躁性を損して方に月前の閑談を陳ぶ。朱緇の衿接して、淚荆樹の露に灑き、素玄の交淡く、跡桐山の霞に入る。遂に碧雲の秋の詞を叩きて、且つは班陰の夙慮を抽んづ。当に

とはいえ、このような匡衡の態度を一概に非難する訳にはいかない。初めに述べたごとく、この時期の匡衡は念願の文章博士に補され、これから大江家累代の学を背負うべく気負っていたはずであり、当時の貴族の教養としての仏道に多少心を引かれることがあっても、隠遁出家などは真剣に考えることなどなかったのである。加えて、本作は時の権大納言藤原道長に従って比叡山に詣でた折に、主人である道長の命で作成されたものであり、主人に対する挨拶としてその政治力と信仰を兼ね備えた人格を称えねばならなかったこともあって、儒仏の混然とした内容となったのであろう。

二

以上、匡衡の「冬日登天台即事」詩序並びに詩の内容に即して当時の匡衡の仏教に対する意識を考察した。

さて、匡衡と仏教の関わりを考えるうえで見逃すことのできないものに勧学会がある。これは慶滋保胤を中心とする文章道の学生と比叡山の僧侶たちによる一種の念仏結社であって、春と秋の年二回行われた。その発端については『扶桑略記』第二六村上天皇応和四年（九六四）三月十五日の条に以下の記述がある。

大学寮北堂の学生等、叡山西坂本に於いて始めて勧学会を修む。聞法歡喜讚の心に由りて、法華經を講じ、經中の一句を以て其題と為し詩を作り歌を詠む。序に曰く、処に定処無し、新林月林の一両寺。期に定期有り、三月九月の十五日。《已上保胤》
（原漢文。訓みは私案）

つまり、法華經の講説と和歌作文の会を伴ったものであり、僧俗相

集って行われたのである。

この集まりに匡衡も参加していた。「江史部集」中卷に「暮春勸学会聽講法華經探得大通知勝如来」「暮春勸学会於親林寺聽講法華經同賦惠日破諸暗」の二篇の勸学会における詩を収める。この二首がいつ頃の作かははっきりしないが、桃裕行氏の『上代学制の研究』によれば、勸学会は応保四年に始められてから寛和頃（九八五、九八六）に一時中絶しており、再開されるのは二〇年近く経った寛弘元年前後であるという。また、勸学会の会衆は本来、大学寮の学生であったことを考慮すれば、匡衡が勸学会に参加して詩を作ったのは、彼が天延三（九七五）年に文章生となつてから天元二（九七九）年の対策及第を経て、寛和頃の勸学会の中絶を迎えるまでの間ということになる。^{注8}従つてこれら二篇の作は先の正暦四年の「冬日登天台即事」詩序並びに詩よりも前の作品ということになる。

勧学会の性格については、小原仁氏により、天台淨土教の影響を受けた宗教的な面と、白居易の影響による文学的な面との二つが指摘されている。二つの面のどちらに、より重点をおくかは、会衆それぞれの家柄や立場によつて相違があつたらしい。文章道の家大江氏の棟梁である匡衡にとつて、宗教的な面の占める部分がいかほどのものであつたであろうか。勸学会における二首の詩を検討することとする。

暮春勸学会聽講法華經探得大通知勝如来

大通知勝在娑婆 大通知勝娑婆に在り

入滅以還歴劫遇 入滅以還劫を歴すること遇かなり

能使衆生登彼岸 能く衆生をして彼岸に登らしめ

若干眷族過恒沙 若干の眷族は恒沙に過ぐ

雲無来跡唯聞衆 雲に來跡無くして唯だ衆を聞き

風有芳心更供花 風に芳心有りて更に花を供ふ

を渡って波の音を聞けば、漢の武帝が海の彼方に徐福を遣わして神仙を探させた故事を思い出し、その愚かさをそしるのである。」

比叡山から琵琶湖を望む実景と重ね合わされているのは仏教的な清らかさではない。『史記』「齊太公世家」や『蒙求』「呂望非熊」に見える、太公望呂尚がまだ貧しく、渭水の南で漁をしていた時に周の文王に見いだされ、師父となり政治を補佐した故事と、『漢武故事』に見える、漢の武帝が長生を願ひ、道士たちに神仙を探させた故事を引いている。『漢武故事』は道教的な書だが、それを「そしる」のだから儒教的な立場と言える。

その次の「石に触れば雲興り、旱天霖雨の用を作し、玉を含めば木潤い、土貢廊廟の材を任ずる者なり」の句は比叡山が深山であることを述べるものであるが、その表現は完全に儒教的なものを典拠としている。「触石興雲」は『文選』「蜀都賦」の「岡巒糾紛触石吐雲」を引き、雲が沸き起こるような高く深い山の様子を描くのみだが、次の「旱天霖雨之用」は『書経』「説命上」の「若し巨川を濟らば汝を用ゐて舟楫と作さん。若し歳大旱ならば汝を用ゐて霖雨と作さん。」という、王の政治を補佐することを比喩する句を典拠としている。「含玉木潤」も『芸文類聚』所収の『大載礼』の一節「玉山に在りて木潤う」を引いており、「土貢廊廟之材」は『書経』序に「禹九州を別ち、山に随ひ川を濬ひ土に任せ貢を作す」とある「土貢」の語と、やはり宰相としての政治能力を意味する「廊廟材」を用いた句である。従って「此の山を以て君子の徳に比ぶれば員外藤納言之に近し」とは藤原道長の政治力を称えているのである。

しかし、そのような道長一行が目指すのは「善根の山」比叡山であり、そこに建つ「功德の院」であった。そこで再び仏教語が現れる。道長に従う「虎牙、蟬冕」はそれぞれ將軍と侍中の別称だが、ここは一般的な文武両官を指す。その対句となる談ずる相手の「鶴勒、馬

鳴」はそれぞれ古代インドの高僧の名で、比叡山の僧侶たちの徳の高さをたとえる。「叩疑氷」は、先に挙げた「遊天台山賦序」中にも「夏蟲の氷を疑ふを晒ふ」とあるごとく、夏の虫が冬を知らないために氷の存在を疑うような無知暗愚を「疑氷」と言い、それを仏法の力で明らかにすることを「叩く」と表す。

詩序の残りの部分は匡衡がこの作を命じられたいきさつを述べる。道長が一儒生たる匡衡に「翰林主人」（文章博士）なのだから「詩を以て仏事を作せ」と命じ、匡衡は「これまで儒教を学んでも、己の實力を認めてくれる人もないまま、徒に年老いていくばかりであったが、幸いにも仏縁に引かれて、道長のお供をして比叡山に詣でることができた。」と感動を表し、喜んで詩を作ることを述べて序を終える。

こうして見ると、匡衡は詩序の中に、仏教的なものとは儒教的な価値観とを交えても、なんらの矛盾も感じていなかったことがわかる。

「これまで儒教を学んでも価値を認めてくれる人もないまま年老いていくばかり」と述べてはいても、世を捨てて仏教にすがろうという姿勢は全く見えない。序に続く詩にしても、儒教的な語句は殆ど見えないものの、深い信仰は感じられない。「常に冠を掛け、職を辞し隠遁することを欲す。」と言い、「未だ迹を晦ますことができないのを恥じる。」とは言ってもやはりそこには俗世を厭う深刻さは見えず、一種のポーズがあるだけである。むしろ、「詩を言ひ仏を讃ふれば風流冷く、法に感じ僧を礼すれば露味甘し。」「安じて知んぬ、珠を繫げば（数珠をまさぐるの意か）酔ひは猶たけなはなり。」の句からは、あくまで俗世に身を置きながら、仏教の雰囲気を楽しんでいるという姿勢さえ感じられる。雰囲気を楽しむというのは極端な言い方としても、匡衡が決して俗世を捨てず、仏道との間でバランスを取ろうとしている態度は、序において儒教的な語句と仏教的な語句とで対句を構成している所からも読み取れる。（詩序の傍線部参照）

感法礼僧露味甘

たく
法に感じ僧を礼すれば露味甘

恩煦豈凶兼二世

恩煦おんく豈に凶らんや二世を兼ねるを

安知珠繫醉猶酣

安んじて知んぬ玉を繫つなげば酔ひは猶ほた酣ななり

右の詩序と詩は員外藤納言、則ち権大納言藤原某に従って天台山つまり比叡山に登ったおりの作である。その製作時期は、詩序中の「時や十月余閏」の句により、閏十月注4のあった正暦四（九九三）年と推定される。この時期の権大納言は二十八歳の藤原道長と二十歳の藤原伊周の二人であり、匡衡との関係から考えれば、本詩に於ける「員外藤納言」は道長注5であろう。本詩は先に冒頭に挙げた願文より二年後に作られたものであるが、匡衡の官職は殆ど動いておらず、同時期の作品と考えて良い。

本「冬日登天台即事」詩の具体的な内容を句に沿って検討すると、この詩序並びに詩には既存の漢詩文中の句が利用されていることがわかる。

まず、序の冒頭では天台山（比叡山）の他の山とは事なる優れた様子について述べる。ここでは晋の孫綽の「遊天台山賦序」と唐の白居易の「草堂記」とが使われている。匡衡の詩序の「天台奇秀甲天下山」は「草堂記」の書き出し「匡廬奇秀 甲天下山」を山の名を匡廬から天台に替えただけで、後はそのままである。孫綽の序の初めの部分は次のとおりである。

天台山は蓋し山嶽の神秀なる者なり。海を涉れば則ち方丈蓬

大江匡衡と仏教（木戸）

莢有り。陸に登れば則ち四明天台有り。皆玄聖の遊化する所、
靈仙の窟宅する所なり。――後略――（原漢文。訓みは私案）

この書き出しの文言の場合、匡衡の句は白居易の場合ほどそのままではない。が、言わんとしている内容は同じである。また、「海を涉れば則ち、陸に登れば則ち、」の対句の形は匡衡の「霧を披けば則ち、海を涉れば則ち、」の対句に利用されている。白居易の「草堂記」は兼明親王や慶滋保胤の「池亭記」に影響を与えた有名な作品であり、匡衡がその冒頭部を自分の詩序に利用しようと考えても不思議ではない。孫綽の「遊天台山賦序」は『文選』に収められているが、それよりも『芸文類聚』巻七「山部上 天台山」に収録されていることにより、天台山について述べる場合には必ず参考にされるはずのものであった。

このようによく知られた漢文の文言を利用するのは、単に修辭上の効果だけでなく、元の漢文の持つ天台山の神仙的な雰囲気や、隠遁所としての草堂のイメージを、読者に与える働きがある。それは必ずしも仏教と結び付くものではないが、比叡山の俗世を離れた神秘性を表すことにもなるであろう。

そして二行目からは「仏種」（成仏の種）「香象」（青い色に香気を帯びた象、又は菩薩の名）「白牛」（法華経方便品の所説で大乗の教えをたとえる）「法輪」（仏の説く正法の教え）など仏教語を多用し、多くの山を見下ろしているのも、琵琶湖を眼前に望むのも、総て比叡山が仏教の聖地であるためであると称える。

しかしながら、その後はやや趣を変えて、儒教的な漢籍を典拠とした表現が続く。

「霧がさつと晴れて青い湖面が見えるのは、あの周の文王が渭水のほとりで師父、即ち太公望呂尚と出会った故事を彷彿とさせる。湖面

倚青天而鳥纒通

青天に倚りて鳥纒かに通ふが如きに至りては

触石雲興 旱天作霖雨之用

石に触れば雲興り、旱天霖雨の用を作し

含玉木潤 任土貢廊廟之材者也

玉を含めば木潤ひ、土貢廊廟の材を任す者なり

若以此山比君子德

もし此の山を以て君子の徳に比ぶれば

員外藤納言近之矣

員外藤納言之に近し

是以

是を以て

同類相求登善根山

同類相求めて善根の山に登り

一心不退尋功德院

一心に退かず功德の院を尋ぬ

所率者虎牙蟬冕 策遂日而景從

率る所の者は虎牙蟬冕、遂日を策ちて景從す

所談者鶴勒馬鳴 叩疑氷而響心

談ずる所の者は鶴勒馬鳴、疑氷を叩きて響心す

數往來于此場 誠有以矣

數此の場に往來するは誠に以あり

時也十月余閑 景物幽奇

時や十月余閑にして景物幽奇なり

納言尊閣 命一儒生

納言尊閣、一儒生に命ず

吾有法門師友 已以道通交情

吾に法門の師友有り。已に道を以て交情を通ず

汝為翰林主人 宜以詩作佚事

汝は翰林主人為り。宜しく詩を以て佚事を作すべし

今日被引善縁 幸攀台嶽之雲

山の雪に老ゆ 今日善縁に引かれ、幸ひに台嶽の雲に攀づ

不敢辞死 況於詩乎

敢へて死を辞せず、況や詩に於いてをや

若不記録謂洛無人爾云

もし記録せずは洛に人無しと爾か云ふ

相尋台嶺與雲參

台嶺を相尋ね雲と与に參る

來此有時遇指南

此に來たるに時有りて指南に遇ふ

進退谷深魂易惑

進退谷深くして魂惑ひ易く

升降山峻力難堪

升降山峻しくして力堪へ難し

世途善惡經年見

世途の善惡年を経て見え

隱士寒温近日譜

隱士の寒温日に近づきて譜んず

常欲掛冠縁母滯

常に冠を掛けんとすれど母に縁りて滯り

未能晦迹向人慙

未だ迹を晦ますこと能はずして人に向かひて慙づ

心為止水唯觀月

心は止まれる水と為りて唯だ月を観る

身是微塵不怕嵐

身は是微かな塵なれども嵐を怕れず

偶遇攀雲龍管

偶遇へり雲に攀づ龍管の駕

幸聞披霧鸞台談

幸ひに聞く霧を披く鸞台の談

言詩讚仏風流冷

詩を言ひ仏を讚ふれば風流冷

多年不遇知己 徒老尼山之雪

多年知己に遇はず、徒らに尼

多年不遇知己 徒老尼山之雪

多年知己に遇はず、徒らに尼

大江匡衡と仏教

—「冬日登天台即事」詩を中心として—

木戸裕子

昔切利天之安居九十日 刻赤梅檀而模尊容

今跋提河之滅度二千年 瑩紫磨金而礼兩足

注1

正暦二（九九一）年、仁康上人が河原院で行った五時講の為に大江匡衡が作成した願文は好評をばくし、右の部分は『和漢朗詠集』下仏事部にも採られている。右の句がいかに称賛されたかについては『江談抄』に次のようなエピソードが記されていることから推察できる。

此句仁康上人入唐の時、母の為に六波羅密寺に仏經を供養する願文也。講筵に参会の貴賤濟々たり。講畢はりて集会の人皆悉く散ぜしむる間、保胤入道猶留まりて俗客の座に到り匡衡の背を叩きて云はく、彌殿筆至リケリと云々。時に匡衡は彈正彌也。此講席に在る故也。又入道陳べて云はく、是の如きに依り文場に出ざる也。此句作を見て骨心攀縁有り。且つは菩提の妨げと為ると云々。（第六 長句之事）注2

俗世を厭って出家した慶滋保胤を感動せしめたこの願文は、匡衡四十歳の年に作られた。彼はその二年前、永祚元（九八九）年に文章博士に任じられ、文章道の第一人者として本格的な活動を開始していた。

当時の文人の大切な仕事の一つに右のような願文作成があった。注3匡衡の願文も七篇が『本朝文粹』に収められている。願文製作には作文

大江匡衡と仏教（木戸）

の技能のみならず、仏教に関する広範な知識が要求される。しかしながら、それが作者の信仰にどの程度結び付いたものであるかは一概には論じ難い。匡衡には、願文の他にも仏事に関連する漢詩文が数篇残されている。

本稿は匡衡の詩作品を中心として彼と仏教の関わりを考察するものである。

—

七言。冬日登天台即事。応員外藤納言教言。

天台奇秀 甲天下山

天台の奇秀、天下の山に甲れり

名花異草 非仏種不生

名花異草、仏の種にあらずは生えず

香象白牛 唯法輪所転

香象白牛、唯法の輪の転ずる所なり

衆山属其足巖扃有道

もろやう衆の山は其の足に属す。巖扃に道有り

大湖在其前 水鏡無私

大いなる湖は其の前に在り。水鏡に私無し

開霧則見青顔 類周文之遇師父

霧を開けば則ち清顔を見る。周文の師父に遇ふに類す

涉海則聞浪迹 譏漢武之求神仙

海を涉れば則ち浪迹を聞く。漢武の神仙を求むるを譏す

至如夫近白日而士人難及

それ白日に近づきて人及び難く